

★ 第I部 ★

>>> まずはポルトガルの首都リスボンから、
ファドのしらべをお聴きください<<<

1) 黒い船 [暗いはしけ]

Barco negro

詞：ダヴィッド・モウラオン・フェレイラ
曲：カコ・ヴェーリョ

*原曲はブラジル製で、バトゥカーダというリズムにより、大農場のご主人の白い子どもを育てる白髪の黒人女性をうたった「黒い母」（作詞：ピラチーニ）です。

*1955年のフランス映画「過去を持つ愛情（原題＝テレーシヨ川の愛人たち）」で、アマリア・ロドリゲスが歌うために、ポルトガルの詩人がベツの歌詞を書きました。

朝、こわかった！ あなたにみにくい顔を見られるのがこわくて、わたしはふるえながら目を覚ました。でも、あなたの目はそうではないと言っていた。わたしの心に太陽が射しこんだ！

……わたしは見た、岩の上の十字架。あなたの黒い船は光の中で踊っていた。嵐に吹き飛ばされそうな帆のあいだで、なにかを伝えようと振られていた両手。……浜の老女たちは、あなたは帰ってこないという。頭がおかしいんだ！

……窓ガラスに砂をぶつける風のなかに、歌っている水のなかに、くすぶっている火のなかに、寝台のぬくもりのなかに、空っぽの椅子の上に、わたしの胸のなかに——あなたはいつも、わたしといっしょにいる。

あなたは出発さえしなかった。わたしのまわりのすべてが、あなたはいつもわたしのそばにいてと言っている。

2) このおかしな人生

Estranha forma da vida

詞：アマリア・ロドリゲス
曲：アルフレード・マルスネイロ

*アマリアはかなり若いころつくった（本人は年代を覚えていません）この歌詞を一生歌いつづけました。
*伝承のメロディが土台のようですが、作曲者として登録されているマルスネイロは、伝統的なスタイルで男の感情を語ってゆく大家で、ファド界のドンのような存在でした。

神様の意思だった、わたしがこんなにもだえて生きているのは。すべての「アイ」という嘆きの声はわたしのもの。わたしの孤独はすべて神様の意志だった。

なんておかしな生きかたを、このわたしの心はしているのだろう。失われた命で生きている。命を取り戻す魔法の杖を与えてくれる人もなく。ひとり立ちしている心、わたしには命令でき

ない心。おまえは人々のあいだに迷いこんで、毅然として血を流しながら生きている。

もうおまえにはついてゆかない。心よ、鼓動を止めなさい。どこへ行くのかもわからないくせに、恐れを知らず走ってゆく。そんなおまえには、もうわたしはついてゆかない。

3) 貧しいことは不幸ではない

Não é desgraça ser pobre

詞：ノルベルト・デ・アラウージョ
曲：サントシュ・モレイラ
——《ファド・メノール・ド・ポルト》による

*作詞者は、リスボンを讃える庶民的なマルシャ（行進曲）でも最高のヒットを出した人です。

*作曲者としてクレジットされているのは、アマリア・ロドリゲスを伴奏していた名ギタリストですが、伝統的な《港のマイナー（短調）のファド》というスタイルのメロディを流用しています。古いスタイルのファドでは、メロディの流用はふつうのことですが、歌詞により、歌う人によって、ベツの曲に聞こえます。

*この歌詞の「ファド」ということばは、歌のジャンルを指すと同時に、「宿命、運命」という意味も含んでいます。

貧しいことは、頭がおかしいことは、不幸ではない。不幸なのはファドをもってきたこと、心の中に、口の中に。

この入り乱れた世の中では、しあわせになるのはどうでもいいこと。頭のおかしい女はなんにも感じないのだから、頭がおかしいことは不幸ではない。

小さな銀貨は、銅貨よりも値打ちが低い。貧しさはわたしたちを殺しはしないのだから、貧しいことは不幸ではない。

生まれたときわたしは星をひとつもってきた。そこには運命がひとつ刻んであった。星を持ってきたのは不幸ではない。不幸なのはファドをもってきたこと。

不幸なのはわたしたちが歩きまわって、歌って声もかかれてしまったこと。そしてファドをかたくなにもちつづけること。心の中に、口の中に。

4) ポルトガルの船乗り

O marujo português

詞：リニャールシュ・バルボーザ
曲：アルトゥール・リベイロ ——ファド《ア・ロジニャ・ドシュ・リモンエシュ》による

*最初は「ファド・マルージュ（船乗りのファド）」という題だったようです。

*メロディのほうは、伝統的な（作者不明の）ファド「レモンのロジニャ」を流用しています。原曲では、男性が、レモンを売り歩く可愛い娘さんに呼びかけます。
*ヴァスコ・ダ・ガマは15～16世紀の大航海時代の立役者で、ポルトガルからアフリカ大陸の西側を南下し、

最南端のケーブタウンをまわって東側に出て、インドに達する航路を「発見」した英雄的な船乗りです。

通ってゆく、とあるポルトガルの船乗り。彼は歩かない、踊りながら通ってゆく、満ち潮がこぼれだすみたいに。リスボンに着くと、ひとつ跳びで盛り場に跳びこむ。ポルトガルの船乗りというものは、いつもヴァスコ・ダ・ガマを自分のなかにもっている。

彼の荷物は派手な大きな箱カバン。目にはいたずらっぽい塩の輝き。反抗的なベレエ帽のかぶりかた。船をつなぐロープみたいなゴワゴワの髪は、魚売りの女たちのお好み——彼が発明する愛情の表現から、逃れられる女はいない。

ポルトガルの船乗りひとりが通るとき、それは海が通ってゆくこと。人をおびやかす、愛情たっぷりの満ち潮。

5) わたしは川で洗っていた

Lavava no rio, lavava

詞：アマリア・ロドリゲス
曲：フォンテシュ・ローシャ

*アマリアが長く病床で、死と向かい合っていた絶望的な日々、だれに見せるともなく、思いを詩の形で手帳に書いていました。それを見つけた付き添いのご婦人が、ファドとして歌うようにすすめたことが、アマリアの回復への希望に火をつけました。1980年のカムバック・アルバム（7年ぶりの録音でした）は全曲が、彼女の歌詞——この曲は、そのひとつです。なお、第Ⅱ部の「涙」はその後、もう作詞家として自信をもって発表した曲です。*作曲者は、当時のアマリアの第1ポルトガル・ギター奏者です。60年代後半から80年代なかばまで共演。

川で洗っていたわたしは、寒さで凍っていた。ひもじかった。お母さんの泣くのを見て、泣くときもあった。——また、歌うときもあった、夢を見るときもあった。空想のなかで、泣いていたことを忘れた、くるしんでいたことを忘れた。

ああお母さん、失ってしまったものが、なんて悲しいことか！——あのしあわせ、あのころ身にしみた不幸、あのひもじさ、あの寒さ、そしてわたしの空想。

もうわたしはひもじくない、お母さん。でも、もうわたしたちは持っていない、持っていないものゆえの望みを。もうわたしたちは夢を見ることができない。もうわたしたちは、だましながら歩んでゆく、死にたい思いをだましながら。

6) 真夜中とギターラ

Meia-noite e uma guitarra

詞・曲：アウヴァロ・ドゥアルテ・シモンエシュ

*作者は昔の歌手で、ポルトガル・ギターも弾いたようです。歌詞にも音楽にも個性的な感覚のある、深い孤独

感をもった、いまでも忘れられない数曲を残しました。

夜はなかば、ギターラがひとつ。生きてゆかなければならない人生もなかば。そして、ひとりの女の歌にしがみつく、甘く悲しい追想。

いちばん暗い道を選びながら、過ぎたときが通り過ぎてゆく。「時」の声が歌っていた、むかしのセレナータ。

意味のない狂気だ、わたしがこんなところを歩いているのは。生きるとは、道に迷っていること。死ぬとは、こんなところにいること。

夜はなかば、人生はなかば。生きてゆかなければならない人生のなかば。忘れられた悲しいギターラを、理解できる人はだれもいない。

夜はなかば、人生はなかば。わたしをわかってくれる人もなく。

7) かもめ

Gaivota

詞：アレシャンドレ・オネイウ
曲：アライン・オウルマン

*ポルトガルの代表的な現代詩人の作品に、ファドのエッセンスとアマリア・ロドリゲスの歌いかたの魅力を研究し尽くしたフランス人現代音楽家が作曲しました。

1羽のかもめが飛んで描くデッサンのなかで、わたしにリスボンの空を運んで来てくればいいのかに……。いまわたしの見ている空では、まなざしは飛ばない翼、気を失い、海に落ちてゆく。

7つの海を渡る、とあるポルトガルの船乗りが、彼が初めて思いついたことをわたしに話してくれたらいいのに……。新しい輝きをもったひとつのまなざしが、わたしのまなざしと結ばれ合ったら……。

人生にさようならを言うとき、空のすべての鳥たちが、あなたの最後のまなざしを、わたしに形見に残してくればいいのかに……。そのとき、どんなに完全な心臓が、わたしの胸で死んでゆくことだろう。

こいびとよ、あなたの両手のなかで。わたしの心臓が完全なままにときめいていた、その両手のなかで。

>>>ここで、ポルトガル・ギターと、
ギターデュオをお楽しみください<<<

8) はぐれ雲

曲：飯泉昌宏

*これまでギター・ソロなどで演奏してきたオリジナル曲です。ポルトガル・ギターの音色と、南アメリカのリズムのギターで、また別の味になりました。

>>>さて、ポルトガルの東隣スペイン、その南西端アンダルシアの薫りをどうぞ<<<

9) ファルーカ

Farruca

伝統曲 マヌエル・トーレ編

*ファルーカとは、スペイン北西部（ガリーシアとアストゥーリアス地方）の女性のこと。
*この曲は、アストゥーリアスの民謡だったらしいですが19世紀後半に広く有名になり、とくに南西部アンダルシア地方のヘレスの街で、ヒターノ（スペインのロマ）がフラメンコ・スタイルで歌って流行しました。わたしたちがお手本にしたのは、この曲を目玉商品にしていたこともあるマヌエル・トーレの、1909年の録音です。
*なお、やがてファルーカは、男性ソロ舞踊の音楽に変身発展し、とても歯切れ良いリズムになります。

ファルーカひとり、高い山の頂で泣いていた。番をしていたヤギの群れが、どこかへ迷って行ってしまったから。

上のほうにはレモン、下のほうにはオリーブの木。ああ、わたしの大好きなレモネード。

あの上のほうで、ふたりきり。つらい仕事が終わったあとで。

10) みどりの瞳

Ojos verdes

詞：ラファエル・デ・レオン
& サルバドル・バルベルデ
曲：マヌエル・キローガ

*スペイン歌謡史上、最大のヒット曲のひとつだそうです。1940年代に、女性歌手コンチータ・ビケールと、男の側からの別バージョンの歌詞（物語は同じ、ことばの大部分も同じ）でミゲル・モリーナが歌い、大きな反響を呼びました。ヒロインがどう考えても娼婦だというのが、独裁政権の下にあり封建的なスペインでは、騒然たる(?)話題になったとか……。
*作者3人はセビージャ（セビリア）出身です。

遊び女の家の戸口にもたれて、わたしは街道を通り過ぎる男たちをながめていた。真っ赤に燃えていた5月の夕焼け。あんたはわたしの前で馬を止めて言った。「ジプシー女、火をくれなにか」 わたしは答えた。「火は、わたしの口から取りなさい」

あんたは馬を下りた。あんたの両目は、わたしを照らすふたつのみどり色の明星だった。

……部屋に射し込んだ朝の光、夜明けを告げる教会の鐘の音。わたしの腕から出て行ったあんたが、わたしの口に残したミントとシナモンの味。……あんたは馬で去って行った。あれほど美しい5月の夜を、わたしはふたたび生きることにはなかった。

みどりの目、バジリコのようにみどり、小麦のように、レモンのようにみどり。そのふたつの目がナイフのきらめきをもって、わたしの心臓に刺しこまれた。

11) わたしの花売り *Mi florero*

詞・曲 ルイス・ゴメス

*フラメンコとフラメンコ調歌謡曲を歌って踊り、スペイン芸能界の最高級のスターだったローラ・フローレスの持ち歌です。フラメンコ調が大好きだったアマリア・ロドリゲスも歌っています。日本ではローラ本人はおなじみでなく、アマリアの歌うスペイン物として、より知られているかもしれません。「ライブ・イン・ジャパン」の輸入盤CDやDVDにこの曲が入っています。
*本家のローラ・フローレスのCDは、日本でも輸入盤専門店、ときおり見かけます。サウラ監督の映画「セビリャーナス」で踊っている姿を見ることができますが、ビデオはいま絶版になっています。
*アルモドバル監督の映画「トーク・トゥ・ハー」で女闘牛士の役をやっているレメディオス・フローレスは、ローラの娘です。もうひとりの娘ロリータ・フローレスが母のレパートリーを歌ったCDは、最近日本で発売されました（この曲は入っていません）。

「娘さん、あなたの花売りが来ましたよ。薫りの良い花束をどうぞ！」

ブロンド娘は、黄金の花びらの白バラ。ブルネットは黒い宝石の目をしたカーネーション。栗毛の女は、焼き立てで熱い。マホガニー色の女はいつもため息、情熱たっぷりの女性たち。みんなマーガレットの花のように、さわられもしないうちに花びらを散らしてしまう。あんたはどれでも好き。

女たちはニンニクのようにどこにでも入り、スペインのあらゆるものを支配している。あんたの庭の花たち！

★ 第Ⅱ部 ★

>>>大西洋を渡りました。

ブラジルの音楽からはじめます<<<

1) ア・フェリシダーチ (幸せ)

A felicidade

詞：ヴィニシウス・チ・モラエス
曲：アントニオ・カルロス・ジョビン

*1959年のフランス映画「黒いオルフェ」のためにつくられた曲のひとつです。この作詞・作曲コンビは「イバナマの娘」をはじめ、数々の世界的ヒットを生み出しました。

悲しみには終わりがありません。幸せには、ある。

幸せは、花びらに宿る夜露のしずく——静かに輝き、ひそかに震え、愛の涙のようにこぼれてしまう。

貧しいものの幸せは、カーニバルの大きな幻影。ひとびとは夢の一瞬のために1年ぢゅう働いて、ファンタジーの衣装を作る。王様、海賊、あるいは花園の娘。でもすべては灰の木曜日で終わってしまう。

悲しみには終わりがありません。幸せには、ある。

2) マダムと議論してもムダ

Pra que discutir com Madame

詞・曲：アロウド・バルボーザ
& ジャネッチ・チ・アウメイダ

*このマダムは実在し、1940年代にラジオ・新聞のコラムで主張していた、女性の評論家だとのこと。

マダムはおっしゃる。「国民は向上しない。生活は悪くなるばかり。それはサンバが悪い。サンバにはカチャーサ（サトウキビ焼酎）がしみこんでいて、民族の肌の色もミックス。サンバは民主主義？ そんなもの役に立たない。なんの価値もない音楽ですよ！」

マダムとは議論にならない。こんどのカーニバルには、オペラを歌ってパレードしようかな。マダムは毒舌ばかり。

「まあおそろしい！ サンバはブラジルのもので、民主主義だなんて！ きちようめに規則を守るブラジル人にこそ価値があるんです」

3) ウエイヴ (波)

Wave

詞・曲：アントニオ・カルロス・ジョビン

*20世紀後半のブラジル音楽の最高のクリエイター、ジョビンは、ピアニストで編曲指揮者、そして歌もうたいました。さらに詩人でもあり、数は多くありませんが、素晴らしい歌詞を書きました。

あなたにお話ししよう——ただ心だけが理解できるものが、もう目には見えなくなっている。根本的なのは、やはり愛。ひとりだけでは幸せになれない。

そのあとに残るものは海。そして、わたしには語れないすべてのもの。あなたにあげるためにわたしが持っているすべてのものごと。そよ風がゆっくりとわたしに告げに来る。ひとりだけではしあわせになれないと。

最初は街だった。2度めは波止場、永遠……。いまわたしは知っている。海に立ち上がった波のことを。愛が呆然としているうちに、夜がわたしたちを包んでゆく。

4) 花とトゲ *A flor e o espinho*

詞：ギリエルミ・チ・ブリート
曲：ネウソン・カヴァキーニョ

*詩人ギリエルミは、今年4月に、84歳で亡くなってしまいました。若いころは歌手をこころざしましたが、定職はずっと電気製品の技術者。50歳近くになって、素朴派の画家・彫刻家としても知られるようになりました。
*作曲者はサンバにどっぷり浸かった一生をおくりました。ほとんどの曲は、一晩ちゅう飲んで、夜明け方にギターを手に歌いながら作ったと伝えられます。

あなたの笑顔を道からどけてください。わたしは、わたしの痛みといっしょに通ってゆきたいのです。わたしは、あなたの人生の花だったときもある。でも、きょう、あなたにとってわたしはトゲ。トゲは花には傷をつけたりしない。

わたしのただ1度の過ちは、わたしの魂をあなたの魂といっしょにしようとしたこと。太陽は月のそばでは生きられない。

>>>ここからスペイン語です。ペルーの

ワルツと、メキシコのランチェラ<<<

5) ホセ・アントニオ

José Antonio

詞・曲：チャプーカ・グランダ

*ホセ・アントニオは、作者が少女のころに会った素晴らしい人間だったのでしょう。彼の職業は、ペルーでは「チャラン」と呼び、日本語では「調馬師」というらしいです（あまりピンと来ませんね）。競馬の調教とちがい、走るのではなく美しく歩むことを教え、乗馬用の馬を育てるのです。荒馬を馴らすことも巧みです。

*アマンカエスは、アマリリスの仲間の、黄色い花をたくさん咲かせる野草。花ざかりの6月ごろは、ペルーでは冬で、海岸地方は毎日黒い雲が低く垂れこめ、そこから霧雨が降ってきます。

小道づたいに、ホセ・アントニオが馬でやってくる。冬の霧雨の中を、薫るアマンカエスを見に行くのだ。つば広のパナマ帽と首に巻いたスカーフ、斜め織りのポンチョを着た、いつでも同じ姿。彼はアラブの馬に、ペルーならではの、猫のようなすり足の歩みを教えた。

手綱は赤と白の二色の絹。そんなテープだけで、なんと優雅に馬をあやつってゆくこと！ アラブ馬は、もう砂漠と戦って前足を上げることはない。やわらかいペルーの大地を、優美なリズムでお尻を振りながら歩んでゆく。

ホセ・アントニオ！ なぜあなたはわたしをここに残して行ってしまったのか！ またあなたに会えるなら、それは6月がいい、霧雨が降っていてほしい。わたしはあなたの背中にしがみついて、あなたの麻のポンチョの下に入ろう。あなたの帽子のリボンには、わたしが取ってきたアマンカエスの花。

6) わたしの不幸の夜

La noche de mi mal

詞・曲：ホセ・アルフレード・ヒメーネス

*ランチェラ（メキシコ色いっぱいの歌謡曲）を歌おうとすると、10曲のうち7曲以上はこの人の作品になってしまう感じ。どの曲も、とても男らしい内容です。でもメキシコでは、女性歌手もみんなマチョ（雄）の情熱をもって、はげしく泣きます。

「もうあなたの名前を聞きたくない、どこに行くかも知りたくない」とあなたは言った。あの、わたしの不幸の黒い夜。

「行かないで」とわたしが言ったら、どんな悲しい将来が待っていただろう。「捨てないで」とわたしが言ったら、わたし自身の心があざ笑ったろう。

だからわたしは、取り乱さず、静かに、真っ青な空の下を歩いて去ってきた。その後はごらんのとおり。わたしは、できるところまで、こらえてきた。そして最後には、海のような涙を流した。あなたに見えないところで。

7) パローマ・ネグラ (黒い鳩)

Paloma negra

詞・曲：トマス・メンデス

*この作者では「ククルク・パローマ」がいちばんのヒット曲です。そこでは、鳩の鳴き声を、恋人を失った男の悲痛な号泣と聞いています。これはメキシコ人らしい情熱というよりは、この人独自の感性のようです。じぶんてギター弾き語りもしましたが。これらの曲は女性歌手ローラ・ベルトランが歌って有名になりました。

わたしは泣くのに疲れた。そして夜は明けない。あなたを呪うのか、あなたのために祈るのか、もうわたしにはわからない。

時には、わたしは自分を壊してしまいたくなる。でもわたしの目は、あなたを見ないと死んでしまう。そしてわたしの愛情は、夜明けにはまた、あなたを待っている。

あなたは自分で選んで、パランダ (酒宴) の人生に入った。黒い鳩、黒い鳩、どこにいる？わたしは頭がおかしくなるほど、あなたを愛しているけれど、もう帰ってこないで。わたしは自由になりたい。わたしの人生を生きたい。わたしを愛してくれる人と。

神よ、わたしに力をください！わたしは死にそうだ、その人を探しに行こうとして。

>>>最後は、ふたたびイベリア半島に帰って
ファドを2曲お聴きください<<<

8) 懐かしのリスボン

Lisboa antiga

詞：ジョゼ・ガリャルド
& アマデウ・ド・ヴァーレ
曲：ラウウ・ポルテラ

*ファド歌謡のなかで、この曲と「コインブラ」(フランス語歌詞からの題「ポルトガルの4月」)は、1950年代に

アメリカにまで知られ、ムード音楽として世界じゅうに流れました。紹介者はアマリア・ロドリゲスだったようです。

古い都リスボン、魅惑にあふれ、よそおいは、いつもあでやか。郷愁の白いヴェールが、あなたの顔をおおう。素敵女王さま！

いまも目に浮かぶのは、あの古い時代のリスボン。貨幣にも品格があった。王家が闘牛を主催していた。お祭りの聖体行列、朝の街に聞こえる物売りの声。あの時代はもう帰ってこない。

9) 涙

Lágrima

詞：アマリア・ロドリゲス
曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

*20世紀の世界でもっとも偉大な女性歌手のひとりアマリア・ロドリゲスは、後年になって、生まれつきの作詞家としての才能をぞんぶんに発揮しました。「わたしは『詩人』とは言えませんけれどね……」でも、この曲は、ファドの古い伝統にもあった、ことばを繰り返して語ってゆく技法を、まったく新しいコンセプトで生かし、それが語られる内容と完璧に融合して、独自のスタイルを創造しています。

*作曲者はポルトガル・ギター奏者で、長くアマリアの音楽監督の役割を果たしました。彼女の日本公演のすべてに参加しています。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして起きるとき、さらに悩みが大きくなっている。——あなたがきらい。わたしは、あなたがきらいと言っているのだ。でも夜には、あなたの夢を見る。

いつの日か、あなたに会えないゆえに、絶望のうちに死ぬことを考えたら、わたしは土の上にショールを広げよう。そしてそのまま、まどろんでゆこう。——もしわたしが死んだら、あなたが泣いてくれるとわかったら、あなたのひとしずくの涙のために、どんなにうれしく、わたしは殺してもらおうとするだろう。



本日は最後までお聴きいただき
ありがとうございました